

富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン

29 タイツリソウ

職藝学院

教授 渡邊 美保子

タイツリソウは、中国北部や朝鮮半島などに自生する宿根草です。ケマンソウとも呼ばれています。タイツリソウの名前の由来は、弓なりに曲がった茎に紅色のハート型の花が並ぶ姿が、釣り竿にぶら下がる鯛に似ているからとのこと。開花は、4月下旬から5月上旬です。草丈は70cm位で、花茎は噴水状に広がります。花の色は、紅色と白色があります。芽出しは4月初旬で、地面を割って出た葉の色を見れば花の色が想像できます。赤紫の葉は紅色、黄緑色の葉は白色です。

花は、花茎の下の方から順にふくらんで茎の先端に向かって咲き進みます(写真1)。ハートの形に見える花はまだ蕾です。満開を知らせる合図があります。なんと、ハートの真ん中が、ぱっくり割れてきます。そのハートの先にぶらりと長い腕のようなものが2つ下がっているのですが、これが、片方ずつ順番に上に向かって折れ曲がるのです。この2枚の花びらが万歳をした時が満開なのです。その瞬間に、内側に隠れていた不思議な形をした白い花卉が現れます。花茎にお行儀よく並んだ花たちは、まるでお天道様には興味がありませんというように、花茎の下に広がる葉ばかり見つめています。太陽の光がまぶしすぎるのか、花びら越しに光をもらって種をつくります。



写真1 4月下旬。紫がかった花茎に10数輪の花を付ける。花茎の半分ほど開花が進んだ様子。

抹茶色の葉は、それだけ眺めても存在感と気品があり、花茎の下で翼を広げた鳥の羽根のように水平方向に広がります。花が満開になる頃の早朝、ほんの一瞬だけ美しい光景を見る事ができま

す。切れ込みのある葉のほとんど全ての先端から水玉がポンと生まれるのです。数え切れないほどの銀色の水の粒が空中で踊っているように見えます。タイツリソウの本当の秘密を知ってしまったような気持ちになります。

好む場所は、落葉樹の下などの木漏れ日が差すような所です。朝日のあたる東側のやわらかな光を好み、西日は嫌います。適度に湿り気があり、水はけの良い場所であれば長生きしてくれる宿根草です。植栽のデザインは、タイツリソウ1株を主役にして、その周りに葉の小さい品種のギボウシ類やニッコウキスゲなどの細長い葉が茂るタイプの宿根草で囲むようにすると良いでしょう(写真2)。なぜなら、タイツリソウは夏を越すと葉が黄色くなり、やがて地上部が枯れてゆきます。そのため、地面がむき出しになった場所を隠してくれる、葉がワサワサ広がる宿根草と組み合わせます。タイツリソウの根は、お隣さんの宿根草の葉の陰で安心して眠りにつくことができます。



写真2 5月初旬。タイツリソウ(紅色)、ムスカリ(青)、斑入りの小葉のギボウシ類、ニッコウキスゲの仲間。